源氏物語抄

初

淺芋掛下

十七 玉くらく　うつつ火　海きち羅

并　くりの林　野分　みのさ

こうこう　ふりの風　萩とう海

十八 むめの人　床葉

并　竹川

十九 萩のうつ葉　うぶ十てう

二十 ひうふ上下　ち姫

九曜文庫
内閣藏書

二十一 かしら木

二十二 よこ笛

廿三 すもり

二十三 ゆふ雪

二十四 御法

二十五 海石榴

二十六 雲隠れ

二十七 匂ふ宮

廿八 紅梅

志ねらめと

あけまた

さらひ

屋こう木

うけらふ

あつまや

あるひ

うきふね

夢浮橋

十七 玉かつら

源氏のたまふ年月へてあれとあかす ゆふれる雪

ゆきまを踏ても心ゝ[illegible]人の[illegible]程を尼ひとりさぬ[illegible]つけても

あるまゝ[illegible]ふるのゝ[illegible]ちはらしゝ[illegible]ふる

[illegible]

[illegible]中にあ[illegible]海[illegible]ふるはの人

ふるさとにたゝ[illegible]なりふきるる邨

[illegible]ふ[illegible]かのにしの京[illegible]ふ[illegible]おさるき人おとゆふ[illegible]

めの[illegible]男[illegible]の[illegible]なりてくるるて[illegible]姫君[illegible]

くてくるふきゝ夕[illegible]上[illegible]三[illegible]

はてゝうせぬるとも男二人ありきるに極いたゝして海
へてこの姫君京にのゝぼせたてまつる父たゝまつる
（内大臣）京卿はけうおもるいとなくいひきかせ姫君十ばかり
ばかりにもうつくしけにきらうたくしきるあ貳の殿おと
いへども京の事をいやとおさるる姫君ちゝもとゝのゝ
ゐたまきおもひてこひしてて祈んけるとたこのひ給きうかる
祈ふるゝひのひこれ出るいるゝ仏法ものあるた夫を事ゝけん
とういひけるもゝつけき人の内るいさるふきけあるてかるもあ
浅世をあつめて尼んとゝるきる此姫君をあ貳れむまことひろう

舟人も誰をこふるたれ
うゝるゝけふ夢のゆゆる
さゝ方もゆく海をゝぬおきふいて
袖いつちと思ちをいふん
うゝ法ゝうゝあ貳れ任てのるゝきれあ貳たりうゝ

ちゝきれをひせんれまへさきてこれ家の次命と二命とを
かゝしひて姫君をちうかゝへむうへるんとうゑへきうめもろと
もひめ君もなきうれしむうれ中ゝ芳ご殿の女やとこれ
うゝるひとうハちゝ女蔵の拾いうんをらひて姫君と因ん
なうゝ物ちんハ家ゝきてゝあう

君ゝ人たうゝ雪浦ふゝ
うゝれ神ちうけてちうん
年ちへていのふんれさういるを
かゝゝの神をつゝちやうん

卯月十日ゝむゝんと製うゝるまにちや毋ちうふ
おちうゝ海へて姫君あのとむすあれひゝ母の君ゝと芳命と
堂に人らゝゝうゝもおくて夜ゝけゝて毋にけうゝまけ
しむしゝおゝけんやおひてくうゝ風んとふふにかいうゝれ
かゝきくうゝなうゝれ女ちうたうゝくむゝ程
うゝ海ちゝおうゝきうゝれもゆうゝや
いけうゝ海ゝちうゝすもうゝ郎
ゆくけうきもみうゝぬ波紋ゝふふして
うせに海ゝすゝ舟ちうきうれ

うきことにも四れうちくひさまら

ひろさのふるも名のうなるきう

あ福もすめそるいひろくぬてはてるゆ海うはれ

名殘とて心はとゆまそまつれえのふさゆますゆとて

うれあ多はるのとゆまるうとそもれけるふふの

くせさへすみてこゆやこにもそれる九源まむ一きう

し人さうめてやうたう外母うれわうて梅まるぬ

又はうふこまを重はんはるあれす人やはかも

水多れくふ海へうきふあを神佛のはめこもやて

やうこへ海うてさせまるうれうちうせへちあゆこうて

まうて行へさるこうぬこうてあ一きこう寺やはかも又

うめちうる人二人世とも四人出やはまたふさ海て

つわはうこいちめうきこうまふまうつちちいふ

所海て四るとふふれとこるいきは心ちめせてあゆこつき

行へうこれまてみあうれれうとうこて所堂に海いうんと

すある京ようまう人まいうて松すやたう海るうちあゆ

うれ世房ふれうこれうきこすけるうる人ともるも四つみつひ

うせたう是ちゆふふれう人につこうひてふふう一の境まて

いろいろ右をなう姫君あひうんあれくうんさまた
ひ〳〵これも寺にまいるなりさて作り人と右近と名
のりあひてありしに佛おがみまんと年はらくれて
いのりする大とこよひてうあり又ちあさすうあり又ちあ
藤原れ間り右の作なあれくうんちゝ角〳〵ろれ人なた
うれはろつけらうと右近ふあ〳〵をろれる坊ちたりて
首ゝ乃お作ふさみりひうすふ秋を答り次のり
て心ろろ〳〵ゆふろのちるろ〳〵あり行ひぬるをいまゝ答れ
さもち〳〵ていうろ〳〵

二ものの枝れうちまちつ身すち
ある川れへる君をうゆ〳〵や
ちつ琴川ちやくれいとちろ行ちも
けふのあふせを身さへろれぬ
やうあるさて立ちする作ちあうてめやすさ作りちなん
も嬉〳〵ふるてやて保氏の仏ろのの海りり山せちたり
いう嬉〳〵笑て人きにちるむすめとろりてうさ
人てに心作ろさせつ〳〵ろあ作ちんろの行ふまち作やう
ちく笑ろて作ふろ

志らすともたつねて志らむみしまえに

おふるみくりのすちはたえしを

右近して其ことのありさまいひしらせ奉れは姫君かへりこと
ちゝにても誠れおやの御ありさまならはこそとうれしけれ返とて返す

数ならぬみくりやなにのすちなれは

うきにしもかくねをとゝめきん

御かへりはさまめやすきれは源氏も御心おちゐてむかしのうへ
まもかはりきこえ給ふ人くもなくて霜月に六條院の
夏の町のにしのたいへうつろひ給ける初に源氏のたまく

渡り給ひて御たいめんありし御けし夕かほのこともあはれにおほし
いてさせて人々に給ひて御ひとりことに

恋わたる身はそれなれと玉かつら

いかなるすちをたつねきつらん

これ歌の心へ是をは姫君なれとも玉かつらと名つけゝる其ゆゑ
心にしを姫君もたとへも嬉しとおほしたれともなかれ路不
御心あはせ給ふまもなのきいしよりくらしつてめやすき不られゐて
入道殿御くらひきはまりしかれいのにけふなん年もくれぬ
かくしなりれうち殿よりおりいらし給へしるおほせや

うすやうの色くなるを源氏の御まへにてたとなしき上﨟女房とりちらして御うらくへうち渡しやうなくまつはるに紫の上もみなまゐりてぬしの御うちよりそへてまつりたるきくおもぬしのあそぬらひかくしこふやと乃こまへも源氏の御くはりて御まへなくて人のうちちをわしきのらんの御心なめりさて御たゝめにち侍御まへたるおんすゝききこえ給へも紫のれとう見しけらいゝてうとちち給ひておもす紅梅のいとあんうしさるかゝえひろめれこうちれもしさされいとやうすゝれさうらふ紫の御まへになり桜の花をやうなるにつやゝか

なるかは梅かもにあかしの姫君へあさきみとりいふのあんわりき給ひてすくれたる小松ひやうぶあらしぬふさいさうはゝしてらちもちる里の御まへくまりなくあるさる山吹のこうちさかさ(み)てらはなのみの御まへ柳の織物のなまめうしたうしくさきつくらん袍わかるくもよしあれも人ますわかまれ給てすはつむも神の御かたへまつ給ふ梅の折えたてうとうらひちらいうしめいたるあらきうさめんにつやうなるかいはかくしてあかしの上の御かたへとはなをなまひやうまゝうさわそ紫の上はめさ給くし御覧しけるひとあひの

たゝぬるうちめるへてなゝ
ぬをうつけ給て亦寺にある
口あれ御うくて室蟬れ居公へ
ゝもちゝとゝふちつゝ
つもゝ花を山ふゝれこゝちき神にすけゝをうつゝて
かつけ給へりなゝいと御きゝ
きてゝれをゝゝゝ衣
ゝ神をぬして
ゝゝ
よ侍の衣をゝひこゝゝ

年五ゝ
数なゝぬゝ
ゝめ伊ゝ
ゝゝ人れ心
ゝる
ゝん
うちの
ゝも

ていたくしさいたるくれなゐの世界にちいろあらはなるあれ
いるしてもちかがくさくらさせてあとはなみにすむ
へき年のうちの花ことにうめしてそれあへてたちかのう
きはひてそくるくるはいるひまもうぐすこしこそせよや
我てふさせんとはてまふ所にたるあれ申ぬの天
菊てうみれるあんこそうんれけるもかくひ仏花と
たくしぬいのくそふふてうのようなるの

日うあふこうるふうんの山ちそくれち

菊てうみある君ちとせ

とふんなうるのちたくされた上をくひまるふ
うすゆくうたけるるのうえにち
世界くるるふぶうけうるくる
くるうなれたいのうえに義代を
すもへこうけうきるくみきる
あるる年は仏寺てもすはをうへきたいるあてたうつ
くるち源氏はうくるちるまつの石の姫君所
くへたくしられるふかたくたくたくさひけこる
かんくるち花ひうまこのふくいるのあるの人葉の枝くうつる芸も

和歌山にあらう

年毎を雲にたとへて嘆くかな
けふ雲はれ神なる こゝろ雨よ

山寺の鐘をきゝて

ひゝき別 年ちかゆれども 空に響く

すゝしい 松の根ちかくなりぬや

うゑ植えし 夏の庭へ 雨ふるゝ 所お法ゝ 雨

やうゝて 雨ふるゝの 庭へ 花たゝ なる 山吹 ゆ てゝ やゝ

ゝゝゝゝゝゝ ゝゝゝゝ あゝ ゝゝ

ゝれゝゝゝに あゝ はゝ ゝゝ 庭へ ちゝき

ゝゝ 庭の 戸 ゝ あゝ ゝゝ きゝ ゝゝ たゝ ゝゝ

ゝゝゝゝ 東京錦 ゝゝ ゝゝ ゝゝ ゝゝ

の 琴 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

ゝゝゝゝゝゝ ゝゝゝゝ ゝゝゝゝ 硯の

ゝゝゝゝゝゝ ゝゝゝゝ ゝゝゝゝ ゝゝ 姫

君の小松乃 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

のゝ上

めつらしや ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

ゝゝれゝ ゝゝ ゝゝ ゝゝ ゝゝ

はるかにふるあり

月次

むめれるふさけはるとへる家あれと

うくいすもなく　常れ哉

源氏も篇にぬしらさうへ行不たあれはいとの

いろ行へてちろさきぬるかれさいるるるかれるる

おさきけるなつうみゆきてあるいきこれ神さるれ

ゆやとはまりゆ徒とゆの所ゆ行ひぬすつ書つる

あるるる此二条のひんりれ隆るひ行てのるれた

るるる行へひとちのえち人の居るあれをかるけるく

ゆてあり行へて柳のれるあのさ乱しけるきるり行て神

るる那の見るるるすふもは海されすさいたるふるさ

れるるさぬとこれはまてもさるつるを居せるれ酩酊の

あさ利ゆとられるるるる行へて源氏ふるぬおて山ふの

このろ衣ゆ行へて行へるやとしとゆるるひきる空せられ

このま衣ゆも立よりて行てさ海ゆるる神ゆたる衣ふるるまれて

源くるつて居ゆ行てあるてゆこるひつるの行ふあるゆるるる人行ふ

さて二條院れ梅のるふをみ行て

ふる星れ美乃横半るつゆさて

よのつねなるめ花をみるに

今は六條院にすまゐしてこの院にまうでたまふ山里に

はなさかりなる頃十日ばかりの天もよほしかけてせちえと

見えたり世なべてのあはれにかなひ四月十六日とぞいとゝさくらのひ

まいりたるにてわりなき殿上人などもすべてこゝにあつまりて舞

ものいとおもしろくかけられたるもいとゝ珍しくあるに

きつゝゆかりもとめたるもあるにあるにあらずあるにて

こゝに不ふさはしからぬもまやらいふるきけるもかの人もて

ふすまをいふなり

前　こゝろ

さはらぬのすゝきに真の内ふかうあいきやうをなつかしう

つゝましいろさまやうにてはなやかにもあるかの

日ぐらうつされ人めかしうはまの御ぐしさ世間のあはれて

すべてきもあるのせてかちとりきちすりてひんつゝ

ゆひてもろこしれいにもあり毎れもの世間なのく一首

かはぎぬをとりてきぬ弟さへ

こゝやなにはてにてはなにかの内さ

真れ池や井をれ川澄よりまゐ

きしの山吹 うつもふるへる

春の月うつるふけてけしきあり

さくらの雪もはなちりける

霞れうへの山もうつる 舟のうちふ

おしさぬ名をたにまはさん

叩やうにうちたきてりけさもうつん方もなく

うつる日もくれす水のわたにあんをけるうれ夜半あとひ

うちもうつの文ちうの詩てむうれ姫君を心のうち紙

つう 菊の花をさして年ふる

紫の四へを心中志あうれを

ふちうの四ふきん名やいわけさ

四ちうををあけ法ものやう此きち

ちあれ あうう城うちけうみる

又法月を秋の中文れ雪のこうやうあうけるへき人に雪

にいるあうさくうれうたれたうこまふなう紫れうへまうれ

ううやうの方へ仏に花うてまつうをかうけて法つひあわ

うへけうにたうふうに志やううれけるうれけるうへる志

うの花あう桜をさして紫をうけてうの四へをうる

蝶のはなかめに山吹をさしてふさをはけこ鳥にはかねの
かめに桜をいれせ南の池より中宮の御まへのいけにおりてたち池の
水きはなともつらひさせてふれすあたらしくはなかし御前波のあやに
見えかはしへる鳥ねの鳥やうろもかさねてはなかしさてい
なりみちし乃めさへけうえよみてちかをそめてはつ色もり香
の人さしてあふくくへなてまつる御せうそこ殿の中将
ときこえし中将の君して

紫
花そののこてふをさへや下草に
秋まつむしはうとくみるらん

秋好中宮御覧してゑみし秋ひとひのし紅葉の
返しとおほえ給ふ

こてふにもさそはれなまし心ありて
やへ山吹をへたてさりせは

とありけるこれにて見え花をとこそふと名つくるもののたよりの公達
後のかつら木と申し柏木中将をはしめ御ちかうたるよりまうす源氏
の御むすめとなれる心へてまかつるの君の心をつくし給ふ御前に
ゐふしも君をえらしふりさくへり
いとめつらしき水の影しみる様さ

これ京ゆくいとまある中なりいつの源氏も思ふことよ
足ずりしなん事いとはかなきに笑んて
海せのうちふ祓ふくうて竹のふし
たれよりはやわひうるべき
いまちにいふらん老よる竹の
おひそめきん祓おとをきん
又堀のみぎる橋れあるを海さくて
橋れるかり神ふるふれを
うちはる方ものもなかぬ郎

神のうをよるかりに橋の
うちへうるくおもうすれ
又れあるを思ふ人あり
折りけて祓もうぬおを思ふ
うあるうかるもをるうん

并　かるる

源氏れ内つうの内だうと無りてのみをこれを思ふの
男ふ内心をつ祓へう源氏あうれをえてあこれたい
めんうおをゆる祓ふへさすしたわせるけをえよう

こゝにて　きゝ　自ら　なるまゝの　よひの　ふるまひ　思ひ　てかの　あいさつ　なし
うら　源氏　夕　苦　より　ゐる　なり　あつめ　光　をつくして
無　なれ　ば　方　より　なれ　姫君　の　みゝ　ふやふ　山　萱　を　赤　姫　の
うちうつ　ゝ　ば　俄　ふる　ふる　ば　いでる　こと　なれ
ゐる　姫君　ば　ふる　ふる　ひ　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば
たく　ば　心　ふる　ふる　ば　いん　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば
修　撰　も　きこえ　出　れ　ふる　ふ
人　の　きつ　ふる　ふる　きゆる　あ　ふる
撰　ふる　せて　仮　ふる　こす　ふる　ふる　ふる

いふ　ふる　ば　ふる　ふる　ふる　ふる　ん
これ　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば
ある　又　れ　あ　た　た　ば　も　ひ　さ　い　て　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば
つけ　て　ば　ふ　れ　ば　ふ　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば
け　ふ　さ　ば　ば　ひ　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば
た　ふ　る　た　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば
あ　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば
た　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば
入　自　ば　ば　成　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　え

お侍ふとうそつきくとうとつ[illegible]の侍るまて給たみる

まひて

思ひあまりむすれあとをうぬれと

むやうにもけるをうくひるさ

ものさあとをうぬをときるあるきを

こめせかるはなやのこうろを

人自みれ侍あるひら蓑の侍方にあくくへ馬のせく

留をつい[illegible]ふとうくたつる侍ることさくたし

下の弱もすはめぬをと名をて

みさをの あやめけふやひさつる

まろうとうんけるふるけ弱ち

いはなやひさけつるへさ

蓑　家蓑

源氏いとあつき日ひんすれ侍るのいてすこふもの

大臣れ君ら弁の君侍ふる中将のあるをうまて

まいりてすしきかうふんをあをたてきふひたまふ

ふ侍のうあいあるあちこさのれいふやうのあを

所まへにてこし給へとうせ平いとくふけと日

ちかふる所に水はけうへもむこうにあるに見ふるうと蟬の
聲もくるしけなるゆふつかたのふりてたちもむらすれば
しのらんとうらふるさとをみるまうすに姫君もす
こうふいてちかしかれ君ちうんなりとれなふちまに
みちうしきせんさいもあるこれをこのへて
かしのもやまれもうへうこまをいとふうしゆいはちて
いろみてきるゆふさへいとたのしうち

伊武

なてしこれ庭ふうきをみて
ものうきねをへんやたつのん

かりよりなる心をこれ姫君のうたにさはるを又たちふ
みせまいらせしハおわせゆふかのはてをとうとうとなる
ふるうらうへなりんとうれをこの心のたふていまうしなる
けきなり

むつ

山かつれうさわるもうあてしこれ
ものの神ちをはうたつなん

又四のたちにて姫君をこうたちもするひとう各のいてう
もてなけいひもかいいてうこうふうこうるてあいふも
詞たうこうれ人のはうをちたとれうまなをすれ

たくはへてみつはをとしふるとすると打
ふりまさせちまれかうてせさいとめさらひる者れ
ちとあはさやはてあるこてしひ遊てちわかめて
ふつひ行てれ人のあ君世間をたすれてその間ふ
えつふは者へ遊まつ世間はふ毎年遊をたつ
行へもふふさ行て詞ったふきるあうさん酒ちさるた
さふひふふいはまてかけふむふふ作ぬをかこそれ
せさあや寸へちせ行ふん いふやあれをんふせ川
てそふに大川水あふ

第つふみひさちれうふのいふちさ
いふてあひふうん四ふれうふ波
あうさの海ちうさ行ふとをぬ
我永れうきの人のつうきう
立ふれをかけふむふをさ海る
ふれうふこふのせさを寸春きん
遠みてをかめてふせるやふふ浪
各ふうれせさるせうふ本て
ふうさふをふそふさふるふふふ

うこのうらくれなゐなるもの
見わたせば川水の花ふぶきの
なかにおのづからひけるやち
この文おりて こうつけて 女所のたまへる せんさ中
紅白君とふ女房ゆゑ
ひとちるふすまのうらに
波うちいてよもうちきの松
この所にも人の四方にんにふきれるふのひもも
あまりたまれ文もつらさ 女所のたまへる めて海

いつ行ふとも 角ふとふ あらかるいつけて あまくる
たまあれ香を 西 さ 志の行ふなり 浦るをつの 恋と
きもつまあり

蕨 うつ火

うつを涼 欲いてせこう 夜のうつ 蕨のわ
やうたう 初まる きる 源氏ふ れ ひ れ
ゆうえ ふ 行ふ 今 ゆ 琴 ふ 行ふ かこつけ
ちちやふ 行へ ひ ちいと ふ 海 の
なやれ あ う ふ れ ね ひ あ ふけ

おもせとらるるさいちやまてのあ[illegible]
うまたるひの[illegible]たるあ[illegible]あしとわるす
うつるかよ[illegible]立うふ高れふうこと
すにさ[illegible]ぬるのを[illegible]れ
ゆ[illegible]ふ宣[illegible]かつるかの
あ[illegible]たくふきつうとあらを
御前れうるかさへまへかたにふることはをるた迎れせうと
つてこの[illegible]ふ[illegible]のたうよきたてた
ひろこうふ[illegible]木のもとにうちまつたうく

しうのあたにおうてはをろきてうあう此音ふ
ようてうるかよと名はをく

萩　鶉谷

中ふれおまへる秋の花とうくさをはへるこうのれ年ようれ
足ふおるく萩をとつてよあるくろ木あうされまを
ゆいはせつておるくさむ枝はすると朝夕露れひうも
よつ[illegible]ふ[illegible]むうとかつやきて[illegible]うるせるの人は笑を
みふもう裏は山も言れてすしう[illegible]すろく心も
あううやうの野ふまいのうもうたうく吹いを

ねとあはれにこゝろも満ちえさるをせれきこしさなかりなれ
くもり露もと満るまし吹ちらしもしさされ上らしちくさ
ひきしれおましにお給ひてまふとも御心たちれちり満とふさをにた
しとあめ給ふありけるを後のゆふ宮とききこえし中将
の君つとめこたましよそみろ給ふ木工も風のいろくふ
けをたしゆりひやふふるもたちんよせられもくるしくみあめ
つましき人のかたちつみ那たとれあうちくもよ
せられとみえぬし給ふも浮世ちあれもつとりやと空
なうろしわ為るあふる満てふるひみちても那といひ

桜はさへても色さかりなる春は明ほのゝ霞のまよりかの桜の
咲みたれたるを見る心ちしあはれを野山の夕への大けき
とて後満ても忘かたきるにしはへり夜すからに入けるする
うせふなくてはかなくさへ衣ふきわとしるて志とらすいゝ
おとゝみられちりこゆせんさいの花の枝ともいとたしけなく
すいかいち すゝきさし かゝ髪しての中に風すゝし志免てもとなゆいて
たり朝日のはちら花やうをいふせんさいの声もられへみ
こきしめさたり日たりくわさ給ひて時ろく風ちいふりな
まうり給ふ秋好中宮もせんさいつくろひ給ふとてこれは

ちとにたちまさるよのつねの人々に花の色香をあ
あらそふとはいはゆるにまして中宮の御まのう
ちまでに心ゆきたる御ありさまなり女房うへ〳〵もせん
さいのわらはせ給ふとて出でたまふせん
きりもあやうるはるやうとくもてあそばれたる御よう
いろ〳〵よみくるる秋のもみけかとうあたまいりあふ
中將の君もはらにまいり給へりこれみすのうちをくろ
ぬりてふきくるをひせもふれたい給へる所ふるひまや
ぬ色をうばうれり　立のはるゝたちはなまふる郭ちる宝

けさはあさぼらけふる雪つけはるやあたちぬいふとする
初ひこうちもあり又ゐをひつめ〳〵ねまひきうみて
はなさくるはるさ女房もあり
（はるひつるぬ　ねけるう　はなさくるはるさ　はるつむさまま）
うばうれり　あり上の所ふるこゝにはるふる琴はなさ
くてもちうふるもはふ所はるさの初きこゆれたこう
ちさひきうけふうけちあうせたう源氏ちつうに
はなかはひうせれはこうひうかうてはきかくうへ給へを
四六上
大　うふ義の義　風はるも
うさ郭ひとうに志むはちて

[illegible]

中將きいとうとも　庵にて時雨のたもとをみしぬ人まつ

みぢひさうつさてれ老さ[illegible]

[illegible]

[illegible]

源氏まいの[illegible]

吹ぬくる風のきはにおもふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

加賀ちいさ村雪ふりゆふへすも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

茶　みやこ

みやこ十二月ゟ大原野へ出かけれあいてさせ給ふ御ゟ

出かけゟ[illegible]源氏出ゟ[illegible]をぬきすてゟるやうにしく

たゟ[illegible]せをゟれをゟてまつ[illegible]ゟてゟ[illegible]車ゟ[illegible]

てひまゟ[illegible]ゟをさこゟゟあやしの山ゟゟつのの[illegible]

ゟゟれまゟひていたゟあゟ[illegible]車ゟ[illegible]ゟ[illegible]

さ[illegible]ゟもあゟ野ゟゟゟ[illegible]まてひゟゟに[illegible]

[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]

の出ゟゟひやゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]

あるかりられ所よりひらくてとまりたる歌人
なりみちとさしの一枝源氏へ
雪ふりたれば
雪ふるの山ちかきの
四月きあるもけふちかつのよ
大政大臣ふる野へ
ちかさせたる例もなるべ
たゝ所つゝひをかうまうとなて
むらの山こゝ雪つもる杉原
けふちかつのあるやふらん
又の日源氏ちむつへ文
これは大内ちむつ内侍

ちうしなへとあこうふめ
四月みうとの所ちれめてたこ
へあうちたゝ御覧して
むつ
新きしあさくりせ御幸
さやうふ雪はれひろ
とたこへなりちるる
源氏
あるの日源氏雪ふ
ふるとみやあさ
これ巻ちられたるむつれ源氏

給へるに此人源氏の御むすめにて内侍督にまゐり給り
御もとは蛍兵部卿宮とて式部卿の御こゝろあはれと見えて
中あはれにおもひなり玉ひつるを内大臣のむすめときゝ給
給へるとなりしか御まことならねとおもひしりて大臣の御もとより
御せうそこあり源氏玉ひつるに君をもきこえさせたまひてまつらん
花のうしゆゐは内大臣殿を入まうさでつねてまたやこの御た
いめんあるへき御あはれなかりし御あはれにこの三條のおはしますや
よりいらせ御心やすく御らんし給へまいる
二くさのゆひめてゆけて玉ひつけ

わかれぬる身けこなくさう

源氏のむすめ内侍督にして玉ひつけにも御とはえたる所かな
御身もかくこそおもひしかひかひしう給ふ秋好中宮と申すも
おもふかしもたき物とものをれはかくもしもみ心にまかせて
給へるはよしとよも玉ふの人の宮給へかゝれとおもふらせの
きぬなんとむしかけなきさくまゐりて給へ源氏
御ねかてあるみちん給ふこゝろさせたまいのあとすけ
あらぬ所あり

一ふかうえてしぬ人をみかれたる夜

君のたまはせに別れをしへも

これをもてなしに衣をいふもてなしのつまは源氏の所

うへよりおくられたるふるきさま

うへ衣又うへ衣かつけるも

をつくしもかつらもなし

やうやうなりてむつましにみせまさりなりあるいとうしなる

やうみうへるうふとてふるひやるわひあるうしむるとも

御めさきいのときあれもいぬのときにたをかけるいま

ちあはあれもてしものうひきはいなりをとうちれはをとを

をしられぬきう

うぶめやはなつまあをうつ海も

いとうれきんあるれ心よ

むつふうつてしたのもやはりもしたうふて

よるつ波うるふきさに折よせて

あるもうつぬのうつとうし

兼　義もう海

内侍のすけ中つかさの事を給もくうのうし殿れ

中将の君を今海てう源氏のうるあれをしたうかうと

[illegible]けるにかやうにあらしの吹いとこなるきりの今宵て
思ふてゐるけるこゝろをたとへはゝ[illegible]
これまでかゝる[illegible]中ねもしらるゝ[illegible]
うゝ[illegible]ゐれをすゝ深ふやつまを[illegible]秋のすゑつゝ[illegible]
那一校[illegible]へもちてまいりゝ

たゝ[illegible]ゝ[illegible]ふちもゝ
あゝれゝうけよかゝゝゝゝ
うつぬゝゝゝ[illegible]
うすもゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ふゝ肉のたゝ[illegible]
以中[illegible]いゝ[illegible]
[illegible]我[illegible]
[illegible]
[illegible]

いもせ山[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

これ光にまつはれ由縁のゆかりに北のまへ給ひて大臣の北の方
ことにも思ひまいりせ給ふべきなれども北きさき人々ちあへなく
くちをしくてもう露のえんにむすぼほるあしたなること
たまう文に右大将の室

かなしきはいとひもせまほしきなる月に
今めかしき所なりともちかき

月のあるも北まいりと北のあはれき給へなくよう給へるなり
又紫上れは北あるに左兵衛督の室せんさいれ式部卿のこまれ北ちや
しるそ別しこれも玉かつらへ

ちかなんと思ふをあはれかなしきなら
いりはりにしていりさ海にせん

蛍の兵部卿宮より

朝日さす光をみるも海ちれ
ちりけの露をけつすもあるなむ

光しあふ思ひもなくさむらこもえぬべくなんとていとかけなる
ねたれの露もおとさすもて御覧ずる御つひさへうちあひたる

心めて光にむすふあふひたる
あさたく露をわのもやいきつ

蓬 末 枝

内にきこしめさむ事もかしこし人にあまねくもら
れしとはいさめ給へとえつゝみあへ給はす内へ
まいり給ひぬ御さふらひて御けしきれ右大臣は
玉かつれ御かへねかへてたゝしうあやうし源氏のたとる是
心あるしかゝ覚へしめすむかしもなるわれ契りとくちなく
源に御とられさおれさまへとかへとも志給を寸ひけれは女の
御かたをよかのおもなして御しかとなるすにむ給つられて
いし山の佛とのみたのひさ志かりし弁のたもとをなしへ

いかゝ御しかるひたゝかひなくて給て入井給ひかまれ
かのかみもしけさの御あらせんさいの式部の大君なり
御かうちも御かなぬに年比志く給さおのけにかうひ
給て御かしなとからなくすて給へきいつれ兄弟にあらん
公達三人もちさ給へもしも大ねめやむとなし御かなる給ふなる
御かなりすさ御しかあらはれさなれなをこれむかしにうつ
給へるもいとなれはもなく給へらさてる源氏年まかりてとを
よかの御ねなかしるて給ふはおかしくて
たりたちてくるちみ〇にけれ川

人のせゝらぎ繋ぎ侍りしを
見つゝ侍りもすると侍りし所にて侍りし
口ずさみて

うつせ川うゝぬ侍りさみいそぎを
流れうちのあいきゝあん

雪れさきんれるゆふ雪ひけらのたゝ雪の侍るへ
夜うき せんていくるゝ志やうそしてひとめ
よせ神のうちひさ入てたきしろ侍へうゆの方れ松石さ
人もちすうあれも大將うゝるけさゝていうゝる雪うれ

なとのゝまふきゝれ方うのきさを入ふ雪ふてよし
やよふまもふうゝにおこせ侍ゝ神のこゝろもとみるへと
なゝゝうれうれゝまひける

月前

うつゝ福るゝにあゝる雪れ夜ち
神れうゝれいうけ侍れゝれ

ゝふ心るう大ゝもいゝるゝて小のゝゝゝゝち侍ゝう
ゝれもゝい火つゝへきをいゝれゝやうのたまへゝふいを
ゆゝん車も情るゝいゝ松ゝて思ゝれ侍ゝうゝ
侍へも小のゝゝ俄るおゝあゝて火ゝをふせこるゝう

いてたゆのうしろよりはいよりて人のこえあつる
わとも思てはまきれもこゑのるるこゑめちゆ
へたるまきてちひすつまきとたゆみちうろのまはもの
はけたうてまちわうすたゆまるもすううれ
ひまてはとひあうゆふはとめてむうへはふうて
まつうゆふ

心さへ空にうれし雪もよふ
ひとうさへつるかうしきれ神
かんの君ち夜うれちゆふとたるさゆちはるふ大將ち

くうちはもゆうていてゆふはたるひ人れまの君ち
こまはつうまつる

ちこの君

ひとうゆてこうるむまのくるきん
ゆるあまれをとうう
うさうちをこうはちけもさはくる
くゆる煙ういとうこうふ
ちはちゆちはううてようつさゆちはは君うちもも
ようひうるちてはうてまつうゆふふの方れはちせんていの
式ははこうのうまきゆひはゆうあうんこうるゆさのう

うつわれ者ひ給ふなりて俄にむかへとらせたまふおや
の内あるといひあるゝ又うの目をみくるまんことをこる
うつくしき給へと内車二つしてたせ君ゝこと人
おりしられいらせんとていてちぬふさふ四人くるも
う郎さ小ぶお ふせいのおとゝ ちとにもこひやうて今を
海かつちる行ゝあるゝさいもん方あ 大将の公主 姫君
一人男君二人おりたちぬをむかへ内もとれた
もする行ゝるいらへみきこゝ侍てこのまん
車を姫君ゝうるとれるすつまふよゝね給ひしんし

おもてのもり殿おたる人るゆつる心してひとゝ美れゝ
いたゝうとさてもり殿のひれるるかゝいのさゝして
ハ給ふ

姫君

ゝハとて中ゝうれぬるまゝさつる
海ゝれもり殿よ家をつもるる

小の方

別れ給ふ無ひいつゝるふふゝと
ゝうて海るへゝまゝれゝ殿よ
御れるひ人ふゝ中将の君ゝふふ美れゝたちるれを
ゝひゝてまつるゝて

中ゐ

淺きをといひし海は水もすくなく

やとりる君やうけとるべき

いこいをなりひとり来て大將の御ゝうるはしと海る

こるゝうゝも岩つるれ水のむすゝれん

うけとも〳〵なるわらぬよりと

御車ひきいそやのの木すゝをうるまてかへりつゝ花と

つきたりゝ高にちまゝとりて源氏のゝとりれやふもゝ

ゝちゝひける大將をやうて武戸ゝの高にまいりゝひつも

ゝも服君ゝたいゝし給ゝゝ給ゝ福もゝの君十まるゝ給ふと八ふ

なりたまふゝゝゝ車まのせてゝ厳ゝ海ゝゝゝ事ゝゝゝも

なさるゝさ人〳〵ゝゝゝゝゝ給ゝゝゝゝゝ

給ゝゝなゝゝ内〳〵まいり給ゝ事一大ゐれ給ゝゝまあゝゝゝ

ゝちもゝゝひゝゝ給ゝゝ年ゝて男たゝゝあゝけるゝゝゝれて

ゝれつゝてふ内ゝゝゝゝゝ大將ゝゝゝひつゝいとむつ

ゝくさいきゝふゝゝゝゝ長ゝれ宮ゝゝみゝゝれ給ゝゝゝゝ

ゝひ給ふゝなるひ給て玉ゝゝれ給ゝゝ

ゝや海未にゝゝ井ゝゝゝゝゝの

又ゝゝ給ゝゝ妻ゝゝゝゝゝ

かんの君もおもてあかうていとはづかしとおぼすにみかどにみ
つからむかへることせ給ふ月にくまなきに源氏のたとへ
にけなひるかゆへて入給へるまつりてさふらひ給ふ

とんせいあん
なとてかくおもひあかつるいろさき紫を
心にふかくおもひそめけん

むかしけくまうしつれぬことといとしくらうさせ給ふ御心もち
ちかうまゐりてみたまふみかとあはれにおほさる

朧月夜
いかなれはえんともしらぬ紫を
心してこそ人はそめけれ

みかど
きのふへは露つゆても梅れむ
あるかひもなくにほひしとや

えんの君のかへし
雪ふかき風につけよ花のえを
立ならふへきかたひなくとも

うへをもはゞかりしくもなくきこえて大殿をあまたゝひて家
殿へ内よりすくにまかりつるをもくらう給ひて内より車ゆる
されたまふ源氏のたとへきこえてもあへなき心ちし給ふ御像なる
人ともなるよし次なかめしれけるまよわせもけ恋しくきこえける
雨いとしめる日参りあまりてまかりて文さしつかわし

かくれて世をけぢめの事なれ
ふるひとをいふ思ふや
玉づさをおくるまに忘ひいて給ひて
なるすると彩れ神ぬれて
うるる人をしれもちめや
又うれこれたるとかしたちるあとし陰さし
てあるうへ
たるするうるしの足へぬる
いるる人をふるふさる給ん

ちはるてまひて女ちはるのたやすに見ゆるとるまて
ふるこれおとこのつまにうるる事いとつふやき給ふを思ふら
にうとふ給ふこれ中ちはるの事あきこんむとて
すうれてうするあるぬうれ子を
いつうにうきこうかすべき
うれ女姫とて志ちるるとるいる事をしてれ君とてこうきえん
のちうるうさうつ四あるうきこの中将の君たうるたちいて
とうる
たうつ四するへ波話る角ようう
ちるさうちうんうるあるうつよ

よるべ波風のたかき舟人も
おもてをぬらすいとつるしさす

十八　梅の実

あられ姫君仰せられおとらぬ
ばかりいろいろ心おきてよつの
御ぞうりあるべきれやうにまいりも打つくべきも
のはおもひきのしはむ月はちものうたなあはせ
さ勢給へとて侍るべくふさつくるまる給へたとも
ちん屋ふ侍るべいとものふつのろ

ちあそさせ給ふこみたさあ大内さてあそせ給ふこさそう
こんのちんれうそ水のおとうふうつまるとみ西光六源院ふ
さたのもせさせ給へもみとたふるへにはれつるあれたそう
いつるいたまれおとちちくうつませ給へしきたこれ十月に
蛍れひあ〜あの文にそ御いそれけふあれたふ
利ぬるとふ屋ひきそえ給ふて梅れおとをめておとする
ほとにたまれ毎文ちとてちるそる梅れえるつけそる
たるみ戸いれを たそうたなあをあつへ戸給ふそを
そ給ふなるきそるそるちんのそこふ侍るのつる二つ

すてたるはるのうつりゆくを又ながめ

ちはやぶるちりにし枝のこまゝにぞ

うつる花神ぞあらしのやど

心ちらんはるのつるゝ木葉にえてさきつゝ梅を

えらばしたるくもすゆるいとのさはもふゆひろふ花せ

をしつゝ心ちはあるゝ春をいとるゝあらしの風をいつるゝ心をと

いふらつるのふるふえるあちをしるなるちんと

ちはやぶるいとゝ心をもむるふ

人はとゝめんこゝろをつゝめと

これつねてるゝ仰るゝあいせをるさるゝ思ふんとて

ほつるゝ井ゝてさせをるを思ふにて思いせをるゝ紫はしの

梅花をちめらしてゝるさあいさせをるゝ

ちはやぶる宮

荷紫

あられしの

くのえゝ

ちられるく

ちられほを

くるゝるゝ

前無院のほを

ほゝとゝあまゝめてゝるゝ兵ゝはゝるふこれとゝせをるゝと

めるまふいとゝきふゝとゝやくるゝさゝんゝやふゝて山るひの

ふちあさいさうれとうちうちてうんうんと泣て大夏は出を

内中将弁乃君ふとも内すれ有るに笛も吹あうせて

内うつるとのしうのて内裏とうめしてあうひ夜ふけて

御うたうけういる

兵部卿

覚れうう春はやいとあうまうん

人しめつるちれれあうふ

内中将内えなてもふやふひうなふ

源氏

笑も香もうつるふうに出まハ

行さうやうとうれすもあうん

内中将

覚れ初くるもえうふるひうはて

ふうの次とうせうれ笛竹

弁の乃

西院うふ身うう花とうへうてすう

初くうれ事もうてうひふまし

文れうう初内車へ源氏のうきうれ内えやうてう一くう

うてうれ行うのうき初二つふうへてまうなふ

文

うう弁のうを文るうあ初ううまて

うあや内うといあやうあん

源氏

めつうとあうさうん人もまちうん

ちゝの錦をきてゝふ思

やゝれ中ゝもゆふ雪ちゝ雪井れ屋の内ものゝ行

してゐるあうちなう中ねを人のむこゝろんなまふ

よし雪ふりてちしれたゝちゝ内もゆゝかゝ千かやうの

さゝある折ふしも雪ねれひめきゝへ文あり

中ね

つもるさゝうゝ世れつゆゝゆゝを

ゝれぬ人やひとふゝゝゝ

姫君

かゝさゝとゝゝゝゝきをけゝゝゝも

こゝやゝんなひゝゝ心ゝゝ後

十九　菊のゝゝ葉

内いゝされゝとゝもさいねの中ねゝゝあゝちゝてゝき

くゝさ心ちすゝとゝうゝあやゝゝゝゝ心ゝゝゝゝ行さ

ゝゝゝこれ中将の君ゝ後夕方ゝゝこゝ行ゝこれ先に

さいねの中ねゝみね雪井のゝゝゝゝすゝん

ゝへすぬ内心れゝちゝゝゝちゝゝゝいゝせんゝゝゝ

ゝゝてさゝへさつねゝゝゝゝゝゝ卯月ゝゝ藤れゝ御の

えゝへゝゝて芳りゝゝゝちしれゝゝゝゝさいねの中ねへ

みゝゝゝ

[illegible]の[illegible]花の[illegible]

[illegible]

中[illegible]小折や[illegible]花[illegible]

[illegible]時[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]のひとえ[illegible]花[illegible]心

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]花の[illegible]

朝日さす花[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紫ふかくそめたる衣　萩はら邸

よつのうらをてらもさきそめたる

さいさやうに衰りちるまで　きいとのはていたるまで

中将　いくはるの霞のけしき　春さきてきて

ちはれひとくたりにあつ綿

頭中将　あをやめれ神なびやまの萩のもと

ふるくやうやう紅もはさん

すふいちはは頭中将　雲ゐのうへはうへ夜みちひさ

ひるはあうひのときあ　ふさいさうこれ

ゆへはたいめんはてとき

淺き名をいひふるしける川ちち

いくあさ　せきはあまた

中将　ちりにけるくさ田はせきを川はは

あさきふのこうちたるん

ろひようちてあくはもしすうるあれをきくるるは

あさいうをとくるのはふはの巻

こうをふよ思ふるきるてもゆく

けふあくるいかの神のつくを

年月のたゆまずもけるて水りの中とるう近へこれと
ものやすく思ふ又うれうつのむすめ又義の男をこれ
年比さいおれたる人るれを雪月の明るうちに海を近
くるに後祝くふへ大内の内侍すけるれもかものまつ
るれ日おるゆけより女つるひょ内やろへこれ内侍いてれる
いるつふへ車よりめて美くつりてあふひ海れ
あるるるるるるる

あふるやけれるさしょうるる
おるあくはてるる歌けるれ

かけてもうたるる美れるる
るるをおしく人やしらん

日吉れまるるあるるるかくるるのるさるまいるせ歌る
ゆへ好れるるるふ一せるある宰相この巻る中納言家
歌ひぬけるるの美るる或ぬもかの姫君れるのるあされを
きるいるるを中納言れるる美るけるれ歌してるめれと
るるるまへみめすへて菊れうるへ菊を一枝折ハせて
浅みるるる葉れ菊を家るるる
さいるもるるれるれる美るけるる

めれたいと訓てくるしうる

ふる葉より花ちるの菊なれと

あさ花見わくなもるるうさ

あしれ姫君を知自うまえへまいらせうそう御れを

思もよるめてたしうるれ祝を紫れ上折うひまいせ給

ふていとをふ時を多車まそ陪てゆふうの夜う酒とれ

侍ちあしれ上ひうすらにうひやさせ給ふ源氏の

まきに大上天ふあう殿せ給ふ御年三十九侍下れをいとあた

めて花のみうの清位なう中納言をうとれ大文の侍従

三条へうとうて侍ふあむうのうとめてうしもすさを

心のまに不こうふをうみうさ侍ろ世給ふ

家やうれ一もすき世の祝れ

ちけさ秋とも成うけうふ

やう水うさふしあうためを色て心ちうけふゆを色を

ふ侍もこうをいうのあうしうう人の

り来をうや百ようのま水

なさ人れうけうにみえ侍つをうて

心をやれいさをれれ

松のさおとゝ四よういとゝふとて紅葉は美ふ松とろうちれ
てゝゝゝ舞へるゝゝる奇とも見へて

ゝれゝゝのおひ木ゝもへもちぬゝん
うへ小松もこけ松ひゝゝ
伊つもゝもゝけとゝゝゝむ二もよゝ
祝さゝゝゝゝ雲はすゝ

この亀の神の日の八条院へ参り奇氏来る
ゝ四十ゝたゝ舞へき御うのなゝゝ御賀ゝゝやむゝゝき
人ゝ四十ゝゝゝゝて拾年ゝ二度ゝゝみちぬゝゝゝゝん

ゝゝゝ男女ゝふいゝゝゝたゝゝゝゝゝゝへてゝゝ
ゝ御ゝ祈ゝゝゝんゝゝゝゝゝ見も賀の祈ゝゝゝゝ
朱雀院もゝゝゝたもゝますゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
舞り奉ゝ己れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ身ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝんゝゝゝゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
池ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つかひまつりつる左右のすけともいろとりとをもちて
しんてんの西東より御前にいてゝ太政大臣仰をうけ給て
池へ給ふてかしはものゝまいる供御のまかないのかはくの
舟さしまいりてかしともをうする殿上の濤をまちゐる
すの殿上人かしろしかんの御まへに志やうの御
琴まいるきんかも兵アに給ふこうこうつるの事まて
かわさかとし川給ふみかしのかまへの紅葉錦とみる中の
へいちうつし中めんをひらきて宇多のへそかく御覧せ
させ給ふさう女の琵琶てうそみなふんのつかさの御

こともなくうつれるふしのかもしぬる濤をと朱雀院も
あそのはきこうしめすあまりのかんと菊をわかせ給ふ
降みしへのせいかいのかの折をおほしいつ

源氏

色まさる籬の菊も折々に
袖うちかけし秋をこふらし

おほきおとゝの折ちおほしい舞に立ちひ給し
ことをおほしいつ

大政大臣

紫の雲にまかへる菊の花
にこりなき世のほしかとそみる

朱雀院

秋ちかくなりぬるけしきも
うるはしみちのおりをこそみる

御門

ふるのゝ紅葉とやみるいまゝへの
たのしるひきる庭れ錦を

おなじ時分の源氏院のけちあけさせ給きめてる

二十ひつの部　上

朱雀院の御門ゐやまさせ給ふ事おりおもく海き
れを年比御ゐいまてけきちへきちすねるの
御寺にに山をつくらせ給へうえちち事をおき

をつくて女三宮おもくまうれ中にせん代れ源氏の
うやのくをおきてうれ給ふ　女三の宮をあまうれ中
にをみうるうれ事ゐるきこへ給へうを御年
十三にをうるおをきいをいけるみう給ふさへ
うんをうしろれ給ふるき紫ゐとあ覚るあつけおきて
心やをくをうもをやとの等をつけて　おるゐ給ふ
をうしろれうみ給ふへあまうる女大納言と申を
を家うる朱雀院の別當て海まを御山住の後
んゐううんこの女をあつうゐやをのをを給ふ

まゝ常方者ゝ玉ゝ
松ゝ
ちゝ
ちむすめ
ちわ
中ゝ
人ゝ
まゝ
ける

百八十九

小侍従ゝ君ゝ
六条院ゝ
ふゝ
ひゝ
朱雀ゝ
ゝて
秋好中宮

ちりかゝるもみぢをそのつゆとふまさ
つけのおくてのうゑさひまきる
院参御供しつけてちゑ集薄

きしつさよみあはせる 美代を

つゆおくのうゑさふる海て
ゝ花さかりなりてあへはをけをあしとゆつりゆゝ
なりはてゝきの初めをしきかんはなりおもゝ
あやまり御りさるをてこゝ海ちかくてはるしける
山のさかりの御はいむをのあるこゝ人をふしてゐるく

ふと東をなりの女御をいゝやすかちゆすをみちてなき
さしてゐるのちをふしひる六条ぬんまいゝ
なりつゆをせこのふを源氏をたやさをゆつりかふ
中ちをまをりけるをなりをこの海を
ひるふををつゝををて六条ぬん早ちゆへなりををいの
ゐるををれを名を花てを基ち初ひるおをてまつるをいを
いるををこをもをををゝ正月十日の日ををにをゝ
ちゝ人の君ひるふをりなりを本性ひやふをなをゝをもをて
をこひひををて御ちををれをををををををえ

十二こうてう文をされ所ちゃうてうこうとおりれうう又うつて
ほふらはうさうたいはゆするつきかけれ名くらひんのみれちんをえ
金銀まて是くゝいろうゝふろくれかゝひつ巳後はは引出ものゝ
れうひつこうのゝ所子ちかんゝちめ殿上人を内裏之
ゆんれ人くゝ物をまいり給へうれまりにいて給て六条院ち
むうれ上ゆ所ゝいめんゝちんのれうき居して口れ給海
ゝうまいるむの所うゝけまい給せて

けう葉さ決はへの小松をひきつれて
ゆれいちゆをいのふけふ邦

ひけうれはゝいつゝふうけうゝるを姫うゝ給へち
うれ心ちへり

小松原すゆのうひゆひうれてや

みへの口う邦も年をつむへき

この帝のようて光をけうふと名つくあうつきみてかんの
君ゆゆかゝて世こ人を六条院ん家ゆんるけうゝ給ふと二月十五
程あり紫のうへを笑うけて松ゝみうんゝも空すう
いてさうやうれを中くゝ給へいゝ給ます

紫の上

めふちうゝうつをたうる春の中を

ゆくすゑとをくこのうつる郭

源氏

今こそはゆとも入めけるあさ

よのつもるゝぬ中れ繁るを

三月九日ちる世二の文へ夜れ名く源氏おり寺又雪

ふるるあしら梅の花うつけつる世二乃文へけふあり

源氏

中みちを入つる程ふきれとも

心ゝるゝはけされあしら雪

世二文

すゝるゝてうの宮にうき入ぬへき

はるゝゝるゝ雪あり雪

かゝてゝ朱雀院をけれ御ちるゝゝを結ける紫へ文あり

朱雀

ゝもさみ山せる結る心こゝを

入山ゝもれゝるゝなゝきれ

御使ゝ世房してゝけけいゝさせてゝゝふゝへゝる

世のゝゝゝゝゝゝきけひ

ゝもゝ世れゝうゝめたゝけゝゝき

ゝゝゝゝゝゝけふもゝれゝ

御ちふゝつゝひ結てけちゝ山のみゝゝゝけける世御ゝや

ゝゝ不ゝれけ結ふちゝ結ゝれたゝ自夜の

内侍のかみ父おとゞの住家に二條の院よりうつろひ給ふ
おりふしさいの文もかくれ給ひけれは心のとかに住給ふ
あやにくなる心とおもしろきをうちしくに思ひて源氏は住なれ
きこえ給て文立給念住に文かよふ路ふかくなりけるいつゝれ
さゝれたるを源氏くしてかへせて御ふくをすゝきてと
なとかくしひ給へも内侍のかみあはれなるまさりてあり
給ひくえかりあるかなとなるしき山の住門は住ありけるを
きしわこきていかなる給むうしかたうたとうきこゝろえんけなく人に志ぬ
とても心はらんこそかくちかいかきれとめてもなれ給ふ

内侍

なき身そと人まちいひてなをなす
　心のとかにいかゝこゝろえん

といふ心なりけれとも源氏のさのなるかなしく人々て源氏はか
給へりいかゝせんと思ひこらへて夜もふけぬれはかへりて

源氏

年月を何にへたてゝ逢坂は
　住もせきあへぬ涙なる

おぼろ

涙のこせきとめかたき清水まで
　ゆきあふみちもなくにそありき

とりけさやうなみてまひなせといはたゞすまのさいさき給

ゆへうとうとちてあひたるさまにいまゝへようもめつらしく
おもわれて四りもロわり山きはれはてあるほてやまとひ
ゐてゐいてゐふ父二條大臣殿大臣殿とき萩れ花のえん
せられしうの萩乃むさうあれも立留給てこれ萩を
いふうめきるえまのなとうえぬ心ふるひうふるて
人めして一枝おりせておわるる自後のみせ給て

きつみしもたすかうこうすまん
ゆもるみつへきやとの萩波

花のえもるうしうして

身をるけん小ふちも濡れ萩ふて
かけしやはちこうすはの波

せさりうれるかぬきうしるやうふかくひおうて出
給ふ祈くれの内きもを紫乃上まちこうゐてさふ
こうとうんゐへとも伊勢へのやうちあ祈くゐ給ゐ
源氏なとかゐ兵をうゐ給ふ給ふ給ふ給へ給へ
行へ給へとくくゐ中給ふうはあわもちて内よみる
源氏

角うちうく社やきぬ給へ

まき葉の山もうろひまきり

水ぐるまあきなとたちて流れとうとぬると

ちきりかりてふるうきにたてとるる

とにふれてやすらぬ世の四れさ海いとくるしけるあしの

世御ちはなれ給へめてかたていつくしかりてあるすべなりれ

あるしれいるる君公ちやや六十ゑ古なりてこるるさ

ゐけ人ゐり世御をきりつるるまーませさこのあるる思

いとめてるるーゐ後めるるゐてるるきてゐ代ちるる

にて生れ給ひし事入る世いまとるれ給とさなけ

きーてかるりゃせを後くるてきゐ給あるれ上るる

百九十五

あるるもかるーしけふるふるくるーさのるちるくさあるひたまふ御あ寺

あまる

老の波うひあるるふるちもて

志ゐるるあるを後のいるもる

志ゐるるあるを波路の志るへて

るるもみをやちゐ代るまやを

とて御ふるさ給ふ

老をするあれ浦の海人も

心のやるるるけーもせ

三月十日あまるにる宮いるる後へる源氏れ流も笑

めずらしうて嵯峨とはわかさに紫れうへも志ろき志ゆくをして
うるはしきをたとへいふこゝろ源氏物語にいつしかいとさくらまつの
いろのこさにうつろひやすきなどもおつるこさにいとひさしくもの
あはれ入道こゝろのすきていまはこれをこそ(ふる)入道の
ちゝ大臣のしをつまくるまたとゆんくちはしてせゝの故
ともたちさいちゐあるせゝ(ゝ)位よりの神おもしめてゝて
おきさるくらんをもとくゝ書ちらして都へのゝせてあ
はれ世間こゝちさみるちをはてゝ(ゝ)はるゝ(ゝ)れるつきてゝ
明石のうへをゆゝけんとそれきちゝき入道を見ゝ深窓の

山を右のあたにきけゝゝ山れたたよゝ自ゆいて世界を
てゝ次ゝつゝちすゝけゝかゝれて出えるあゝす山おを
ひゝゝき海のうゝへおゝて入道ちいさきあゝてみゝの
ゝゝさけてこれゆゝゝみたゝいゝゝれてゝあ所み
河流とゝゝるゝれ出ゝてあゝれ上ゝゝゆれゝゝしゆく
ゝつゝこの美ふゝのゝとゝけてかゝるゝゝんたもゝてたゝゝと
くゝゝくかゝて

あゝ入道

光いてん陵ちゝくゝゝゝゝゝ

いまゝゝみゝしの美ゝゝすゝ

翌日さてうせにけるとさてこそ
あるべきもの後のうらうらに入りてれあるべきの事しる
所のうらに寺にまゐりあるべきわたり子六十人まうもとせ琴
ひきて佛まゐ施入して法師一人ひとり二人法華経三人念
おい経ひとりあるひとりひとりめ一ことれ所おとらわかるまも
経ばらんあさうあるふ所すてるすたいめんとある千と
又まさしくあを居ぬちあるるるるるたれるのなまるまるる
心ちしてあるめすしなまいきうこれぬもとをものちに源氏
うけとりあひて侍所にひきてくらんとるもるしなまふ

やすひれすぬる六條院ふ侍るを世こそおらしますきんて
のあるなりやるれれゆさあひられてすあるかるれ程を
しめてみあるちいさ程へうこれ比宰相の中将と大將とや
ゆうの夕ぬる源氏まるを心つしやるあるとて世人まあ人のたる
とやきうまれあるてかしまれの侍りんのこれたる
あるこ三侍りを程ふ花雪のやうるちりかるを桜ちよきて
あるはすさしてたれるの侍りんのうちるみちれ中のしふの
程まる程へ留おるふ世このえおちますみちの内より
ひ程こえちいさうつくきを入すこうたるきなる程

こをいつけてをるいまるつぬやつふいとるく
つさておけんとひこうろふるとんみすのつまあふるひさあけ
ふまとうろ足とをるひさしれ二の月れえんうにちをる
世房ろく人とをみくす桜のあとをるゆくてを柳れいとの
やうまこちくあうくひうれてうちきるたまうにはをはを一尺ち
うたけのあうたらんとみのゆふはんれ日うけをたく
くき心ちしてちこうふくをはをのちうるをつまれ
うさ松をるやるみくう松をいくなけをみくうをはる
おもあちわいらふくうつくしれ人やとえへたうおりうとへ
つとうるしき

うちきといふちきぬを一寸せもく一寸うくさおるうえ一れ人
なくてをきぬおなれを侍ふふくき人を大将をうくう
いくくて御ちふを御ふとくきたちうれ近へうさもうは
宮ふ心をくの清つ巻もの志つうをすの不のうなれをう
れを足をまくと繋うを御くふ手侍おくれなまくみる
ゆうを御てりさをるを涙つちいちあをまくんやくのおちる
へきくうおをうを志てちうきまくるはをんのうをを邦に
よせてもなるの加てうえ世を御れて侍のふみすをうをも大れと
おをく車ふて源氏の世三れ侍ふをうにをおちはさぬ

[illegible]

いろかれを花のまつとふ雪れ
横[illegible]さて袖[illegible]せぬ
み山ぬる袖[illegible]もこゝろも
いうてもれ笑のあるべき
やまのつこのうち春初こゝゆこうたせてとあり
[illegible]かゝひてゆさけうれたまふれ苔ようちく
いくは心ろていつもふこうつさし仰れ
うへふうゆう[illegible]

よふみてなるぬ歌をきけきれと
名は高[illegible]れ山ゆふけ
いまたよ笑るいてう山櫻
なるぬえたに心うけきと

同　けう郡下

これ是を名つこうを朱雀院の八十れ御賀ふ春之
うめてまつて女えうち侍て[illegible]ると[illegible]
ゆへなう侍ん[illegible]中納言ふなりて廿二乃内の廿二の
えをふのうたにうめ[illegible]れういうて女

[illegible]ひ[illegible]へ[illegible]やう[illegible]車[illegible]あき[illegible]世[illegible]
[illegible]こと[illegible]ふる[illegible]かの[illegible]ことを[illegible]こと[illegible]せ[illegible]て[illegible]
又[illegible]の[illegible]志[illegible]あつ[illegible]たら[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]せ[illegible]て

[illegible]ふる人の形[illegible]と[illegible]あら[illegible]せも

[illegible]れ[illegible]と[illegible]なく[illegible]

源氏のおわ[illegible]又住吉へ人[illegible]て[illegible]
つ[illegible]の[illegible]紫[illegible]上あり[illegible]尼公あり[illegible]の車
拾二源氏[illegible]上[illegible]殿上人[illegible]寸[illegible]源
氏[illegible]中[illegible]次[illegible]あり[illegible]志[illegible]海のあり[illegible]

やうにおわ[illegible]いて[illegible]

源氏

[illegible]又心[illegible]て行すれ
神[illegible]る[illegible]

あり[illegible]車[illegible]

尼公

住吉をいけ[illegible]あ[illegible]
年ふるあ[illegible]けみや志[illegible]
[illegible]の入道[illegible]志[illegible]

むかし[illegible]住吉の
神の[illegible]みる[illegible]

あるいとまろくなりてるたくるあのことを思い
すきて夜ら明ぬまとさうさとろ西てふと百さ
くらいるひゆゆる所代のすゆふひやうういとさやロ
うさ夜上人くちちうまてるかうの白きをかさしてみうれ
おとをひてうてつるもあ夜なるの松のふるみうう
なる中みてつけるる所車とれ神ロるもるのうせるふひさ
うる程いとるあう所たいとうつきれ相海ろけうすおも
志人ふとはめるつけてうるけるあしれ尼公れさいとい世の
ひとめてあさ見きうのちれたとうを姫君あふれ君と

いふうすうるうう所もあうれ尼公ふうさいをこい
けるかうるあふもあさ行うも
住聖人れ松平夜ふるおく寄を
神のうけるゆふうも
神人のあうこうもふる柳ちる
ゆうけうるふうさ夜れ寄
ちふうこうゆふうち海いるう寄い
きみいち志るき神れちひう
廿三れふうあちうきんの琴をすうひう行ひきる山の

みうものさまとも源氏ようい給へ重ときんいうちかし
めの院と松ゐせ殿ゐと源氏は院きこうめてこうは比ち
紫は上ゐも居いと海ゐてゐて給へる〳〵わ〳〵中給ふ朱雀ゐん
ゐ十にゐ給ふ年ゐれをけうふまいこせ給んたゐ〳〵ねと今
上ゐいうこ記事ういうゐ勢給へう世これうやゐけるゐねも
源氏の院いまゐて樂人舞人はきゐゐ春ふのゐ法洲島ふ
冷泉院ゐ御位を今上ゐゐゐつゐ給へうゐねのみゐゐね
人ゐゐ中きう五ゐゐゐ六条院の世御れうこ給へるゐゐ人
給ひぬ内へき事ういうゐきこあゐてゐめたうきう

叡慮ゐんのうこを今上れみうゐの御代ゐ中はれゐ〳〵ゐ御の
人ゐう中納言になりて兵れゐとまさゐふつけてゐふ事
ゐゐゐぬうゐゐこのこゐて朱雀院もゐしかゐこ笑めすみや女
三れ内あゐ世こゐゐゐゆゐ給へう一條のゐゐ中にすこ給へも
ゐゐ御へ御ゐんのこゐかゐひまこゐ給ふ世こをも今れみゐところ
ひさこゐきこゐゐふ御いゐこゐとゐれもこれ法二ゐの位をさ
つけゐ給へを二ゐ四親王ゐきいつゐあうゐれ世かこゐゐ
ゐこゐれ二ゐのゐれきんひこ給ひゐゐゐる殿ひ給ふ
ゐのゐゐ第の初にゐゐを世ひゐうねこく

あるべくあるまゝなる紫れ上を女うへあるまゝなる紫れ上を
ゆゝしうなやましきまつるふるまひにてはふおもすれば
比うれも志んてんへむかひさの上いとなりてうれくのひうあ
とも志うへあいせて二ふれ宮のきんのあいせんといとなる
女御殿志ゆうの琴二ふのうえきん紫れ上りうこんあうれ上
ひとめんくにはなりをうてうてうて

松のかゞやかしうるはしゝ雪花のさあさゝるけにあはれ
紫の上を花のたとへまほしうなをあかることん
あるひはゝ松にもあやふみえあはれあけぬる
すゝ乃ようもちゝの院うゝをみる心ちす
あつまれ上はいかまてようあつまてうさ海てを
けゝ心ゝくゝみのふゝやうつゝいあるてちをて
祝ちやうゝ海さうゝみ日まつるふゝちをれ花をみも
うゝたゝはゝかなゝ院うゝ似給へいつもこゝめてたゝ
きゝもいむ自れすゝあゝ海かゝ二月とさゝあ給へゝ有ゝ

ゝれ女ゝの院ゝゝ紫の上もゝをやゝ給てゝゝめに花
しきれゝもゝちゝおゝゝゝ給てゝゝゝゆさ給へも
源氏乃院花ゝ海ゝゝふ年かゝゝあゝて佐ゝのゝのひぬ
ゝ祈ゝあゝゝ心ゝつゝゝて源氏れんをひゝゝ給て
二源の院へゝゝゝ給ゝ男女まゝゝつゝひて六条院ゝを
きちゝゝやゝゝゝあゝゝの源をゝひゝて清つのゝこゝゝを
むゝへゝゝてゝあゝゝゝゝひて二ゝ文れゝあゝ
ちゝゝあゝゝゝ給へおゝゝゝゝゝ年給ゝゝゝゝの
ゝゝゝゝゝ

ちもさるべかりんひまふるういひける卯月にちるぬかるの
まつりあすとて二ふ宮ぬしちくようの御院へ参ふ女房
数おりて宮のへもおなじふちへいてるひまにこまう
一人ゑのもあるうちちくさふくるすきひまとふるて忍んの
うへへせうこしたうちるこひなる所いうう思るやつまて
おちくうふちれわとのこりいる心ゑおくこれきいひちう
ずゆうを境乃おちくうと見へるふ折かこうくるきしき
みせて家ぬしにいさわるたてまつるぬしを落ぬ事を
うずゆうやいとめつくふ後まうとたわすふちあせも水のやうに

ふうれておりはふさはかくけるくうてまつるくいさ
ちの後ろもとふこさふ後ゑんのうれ美ふるく祝こと二ふ
ゑふいてきて寄るとみくうやうて心ゑちいてくへふ美
うちちくうれとかうずうゆへきやうもさるたるあけ寄り
にいと心あくくくくてくちいつるあけくれ秋の空ようも
心ちくあう

おこさてゆく宮ぬも去れぬあけくる
いつくはお蔵のうふ被なる体
いてゑんとするふなくさくて古西あう

あけくれの空のうきくもにうん
笑ふうきつとくんてもやもへき
あくるまを待つるれども おくるもいてたちすいこしたあや
待ちまくる心ちしてゐるあふ
くやしくもつくれたりけるあふひ草
祈れゆるせるかさしふぬる
世二ぬをも大くれ待つきもうとくふおをのく
ふへを心もいくぬをすき待くく吳へ給へを高やくれ琴を
うきゐしてなをするもうやひろゐれとも用くを世三ふ

おちけるを繋うをふて
めくうつくる葛葉をふみてひろいけん
名をもつまをかさしゐれを
をもつくくをちきくうをたてふくをは千ゐ賀茂れ祭の日
紫れ上くへ入給へも山の在主なをくれをきんしやをこみ
拙氣をうちしてきくるこをのけちいさくをくへのうくて
六条れくやす

京殿こをてあくぬをを待ゐれくををくく
くをなくれする君ちきくんなり

源氏は流れ涙をうちながしつゝ
よろづうちなげきすこし
おこたりて後お家とのゝ近くを
源氏の御うしろ姿にて御いとまうけさせ給
ふ六月のなかばうすきうちわたしのすゞし
けなるをなをいとゝ源氏うまし
けふはあれそ
きゝとまる袖やちゝ
もちすれ露のうるはしさを
御涙せきあへずして
哭おくれこゝ世なりてもちすれる

玉かつらなれ心をつくる
二ふたゝびあらぬ
いるる心ちして源氏にうらなりたる
ふるすこしおろかなるひとしれぬやうる
なるにおろかなりて
なるとすれ廿三自分ともいふるあかりとるやうるさを
しれぬふ年みすうれまふをとやおもすと心をすけ
ふるして立とゝ
廿三
神ぬしとやひとしの

なくをきくにおきてゆくらん

源氏

まつ里もいうかちらんうらしまの

心ちくるしすは日くらしれ却

了はて夜ちとなりぬるとおきて明るひるの志なひ

おまれあるに源氏こまりてうもるうとたとて先もうせぬ

るくこころをきれとも内裏をおきて見めくるしなふ所志とれの

ひとりみとれうるやうるるおくを源氏うつけなうれたるん

れくこ品くてまつるくる久るる詞つくいちくとはきるくき

やうるすいるふ心おさるやうるうたるれふをあくふさし

もさらんおくなくて家るるるの人も足つけたるましうを心を

とるるくてくれよくえいくるくつくくしくたるる又法るんの

くくくるくるる事きくに方りもむるくてかるくるくるく

心のふるんちもるやはくくひくするやまひるるるの源氏を人ふ

かくよのたまふくきるくれを内心ひくつるくくれて住かくるる

くるの内思ひいくさるくくふ事れるいまくくくき事るる

きくと云るきくれ行けるたるる月夜の内侍と今も思る

行くくくくくのれちくれくるを行ふくれくるるふいと

あくれなて源氏をあまの内志やくくくけさふと内侍をまくる

保式

あらはれよもとより雲のさかりやすまのうらふ

りしわすれしも波のなごりよ

内侍

なつる海のいろちかのあひだ行きけん

あらしにいさりせし君

こうれう海の高さ五の枝のつけ物も二月六月のきる

ぬまるる山鳥もくるしきれたる山のみうとれたかなはのかのひて

十二月たつるるきり舞ふるの心うれ日深氏清めんれうき志

ふいやを志きうみあしてさけをうく志ゆ行て心ゆるぬ

ひまし里るてなうふれのやうふれとなろうきちてもも

をの行ちと清めんれうき心のおふて行ひてうちふ

なうまる又もふうう波ゆきうちるれ御賀ふう又十

れ志賀ふれも五十寺れ志通經志ふまふ朱雀おもします

志ちるふも海ふる志やふれ

二十一　栢木

清めんのうき加さうにふう二ふのうへうてまつる

今年をもて月きん烟もむすわも

廿三

うるひ　おのひのふるや　おん

立うひて清やまふまううきまと

うるみてくもりまさりてゆくへもしらぬまゝ
先年煙りくゝいへりまゝ
ゆくゝ清なさ二月れ煙と成ぬと
うふあくゝとくちはてるゝ
正月十日比る二月ふるにつり君うゝ行り二十條出心ち成て
山のみゝをこゝしかりゝ中行へもよふゝれていきせ行へる
つねてふ志りくゝ中行て二月ふるち尼まるり行ぬ法ゐんのゝゝ
ゝゝれ世を学ゝいゝ入ゝちして寄るなのゝまゝ成
行へも松ゝやけりゝたゝませ行て精大納言ゝ行ゝ行と

ゝれ行の父たゝ毎小れ方れるゝ行ゝけくゝゝかさゝ
義業乃ふもいゝくゝ見ゝ入ゝ二月れふあまたゝ行
へも入乃宮ゝ中れこれゝ君ゝひゝゝゝゝれも人
志志ゝ志りゐんのゝれ形見と源氏の出心ひとつゝまる義行て
入道のふゝ

行ゝ世ゝゝゝ行を法きゝと人ゝゝ
いゝいゝゝれ松ゝこゝゝん
清りんのゝかゝゝれゝゝ法めゝの大松おゝゝゝゝゝゆいゝ
おきたり一條の義業は文の事心ゝけてゝゝゝゝて

[illegible]たまへとおれるまたいともすぐつるふ一条殿[illegible]へ
まいりおはしまして御ものの[illegible]もてなしおはしまして櫻れいろふる枝
みるもあるにて

四月あるきもうつるぬるまゝひろう
うゝえかれみ　やれいろゝも

御返　蔭葉れるのいろ
これ葉にて柳のめるぬる
さゝちる花のゆゝ御ものも

大納言これ奇をたゝうるにおてすに御ものれうこのち

たゝへ御ものおはしけるもきゝてやつる御ものの涙を
ゐるもふるはちて玉ぬく　今ちるおて

大臣　木ぬしの雨ぬるて　いろさはふ
霞のこゝろもきこゆる　春こゝの郎

大納　なるゝ人もなもいさゝきん　ちすて
ゆゝふれうすゝ思きゝれとも

五月五日の端午の節　うゝ霞ぬるや　霞れ衣洗きゝて
夏ゝ利　いさゝるまゝのちるゝん

やすひのすゝ小一條れ　ゝへた將御ものゝ　おへもかゝ本ゝの

かゝるれすゝきはあらしに枝をゝられ花をゝふりはらひて

たゝとゝのゝしきもとんるゝさるん

ちるゝれ神のゆゝしきさと

御せうこゝつゝふかは世房ちを

かゝもまゝるゝもゝるゝ神ちまさるとも

人をゝ思へきやとの志つえか

世ゝゆゝ老ゝとゝしゝ木ゝいふ世老のかゝれ給へも植木れ

法りんれゝとゝ名つゝ又岩ゝる中将ゝいゝふゝ

二十二 よゝこ笹

山の御門ゝ二ゝの法ゝまゝつゝて後ゝゝゝ事にふれても

つゝゝゝ又あゝやゝゝゝ法ゝ寺れゝふゝるゝゝやゝゝゝぬゝゝいて

ゝるゝたゝゝふゝゝ山れあゝゝにゝゝゝ

うもく山ちよりうることいれ
はつうひのあさふひのあやつまをはひうつ思れめとれ
ものとうをもいそくたうるをはとにきりも地て京もよ
くとくいぬ〳〵はつまいを初ちけうるるこれうふとて
うさふ〳〵もとすすうくれ行れ
子をすてうくきねにうあうける
うれ人のいてくきのうれぬは髪をやとうゆるさせ
はるまきる紅梅れはうをとけるくうしうれうさうふきる
はつるまいのおさなき人のうちるを花とも志ろくうくく

柳をけつうてつくりたる笛やうるかはをあまして
はうふうを見ふるせさる心ちして月つきふるひやるうつく
かうきう秋はうを大ねう一深れえる海うて笛をみすれも
とふ和琴をやうれうをうちくうふひをまて大將ぢう
ぬまうんをひうを行ぢのうくこれを行〳〵夜馬ふとも
こうるは又ひきう志行〳〵笛もるを竹笛をうやすれ大ねの
うくまうくせ行つをすうう吹るし行を
雨降ふるれむくうれやとに伴みへの
秋ふうくぬもしの夢ふ郎

よろこばれまゐらせてとのにかへりぬると
むかしくものがたりし　祝ごとつかせ給
これ宇四郎墨をよこ笛と名づけ吹給ふと蔦葉
ちやうれ琴をすまつるときあきせ給へを心ゆるして
ともにいてゝいまわぬもいふ海さるとて
人ふたりとるきしきおろみる
四ときよのあるれもうをきこしけと
ともうふふ　えやをいひける
大ねこれ笛を吹給ふし我殿うて目をなるめ給雲井の

上ちこれ一源の家大ねのこゝろひまいり給ふるとふうあるへ
しと心えてもろこしふこうひもけの君はあるわひえておき
むつうけると大ねをこち給けんゑんのうち大ねの出家ふ
みてこれふえハ法ふへきうきをほとしひて
笛行ふ吹ようの風のことるうも
未れよふうきゝ祝ようへふん
大ねなきを人の心とめるおなをとうこゝろえて美ふ
みしまを源氏ゆ　給へもとふおろ　ものして出心れ
うちふ笛ハ主　あるけをつふ角さうをこゝろ

いつ君をこころにかけたれば心へ行へり源氏これをえみへきやう
あらとてこひとりくまいて後ふこれいつ思せいこんしてやとり
木れ葉の萩はえんうかつきうるさはと吟行へりとあり美に
つゝ千筆こうれをあり

蓬　すゝむ

夏の比ちすれ花のいろ入乃のゝや沖持佛あ尋ちて
行へるとはくもしに行まれはは屋を佛ゆつりて法花のまん
だらかけうもれうもれるをへやり行ふあるれる源氏おれて
かるるれいとふゝもつもふいろんはとちたるとすやとて

かゝるあれ扇にうきつけ行ふ

源氏

ちすの葉をおるしてるとゝ聞ときて
なれいつゝけふるのしき

入乃ゝ

角ゝてるゝちちはのゝとを聞ても
君ゝ心やすまりと行ゝん

宮はちはは經をも源氏ゝ聞はは行ゝ西てつゝかせ行へおるく
あゝゝ經をもうさて東ゝ行ふきゝけるゝ聞すちゝも
うへふかつやゝすゝつきをみる人後るゝきゝ秋ゝ聞てあゝ
たゝれとゝゝわゝふへゝあきれふつゝもゝもゝ行へ

[illegible]をみたるをゆふぎりけふあらんふり　源氏院

[illegible]けくもくるしせはてもの[illegible]の[illegible]ねの[illegible]十六夜の

月のうけうらくるるかいとはあらくみまくに[illegible]

さうひていのちれなるもうの又[illegible]心[illegible]ぬとすもの

なふ心ふくいるめさたるこそ[illegible]きれとはるまへと

入道宮

大うれ秋をもうしとふりと

ふうすてうくすもれ哥　源氏

心もてうのの[illegible]いとへとも

ふをすもの哥ふうせぬ

こうひすもは[illegible]んてあうてはひうこん

きんをひさふ院うの御使あうきいん　院

雪れうへをけるれる位[illegible]

おこをぬあられよの月　源氏

月うけをおもの[illegible]みるうう

うやうれときうれる

うれ御うういうやてまいうはてきんさいかんうて

十六夜れ位あうひあう

二十三　ゆふ雪

海の人の名をとりてはやくより　近衛大將この一條の
殿の葉れ家をたづねしめ給ふ　あす和秋の比小野へおも
してひえの山ふもとなる所に初てはし師のもとへ書
給ふ　あすあれ申初れなめる大將小野へ行給ふ
小野にあるこさるれども　ゆへあるさ海に住る　近衛の夜も
小野ふ大ねと海に行給ふ　人をめしてるをくるすの
所にちらせにつりせおのこともろへてみまくさろへ
せるあんとはらまま

山里はあれをろふる夕雪ふ

立いてん宮もなるき心ちして
こよろ行ゆる夕雪ふれ大ねよ山の花を名つけろ
山はとは海るさをとろめて　ろ雪も
心ろなる人をとめ後
ろれ夜ちろつきよりて年比の心さしれるかろ中納言を
家のろやうきせるきるあて
ぬれろ神れるをくろすへき
ろいさ海ろ行へを
大ろ　大ろろ家ぬれきぬをきせすを

くちみ神の名やちくあく

旧

おきなやのさきもれ露よりおちつ

八重ちつきうとうけりへさ

義紫

ふゆん草葉れ霜をうつとふて

ふるもぬれきぬをうけんとやふふ

都ちうあるひて文あり

玉ねをつれるさ神ふとめおさ

ひうふ心ちは陸とふちうあ

了れ夜ちおちうちちうふてあるぬ中ちるとうやす有ち

ゆつけて心のくふしきも陸ちるうちちしてこよひさく

おちもぬ人めるふれもれを

世郎義志ふれへをいつことて

一よいうれやとをかるん

鳥れあるのやふうきへをちちるみとさなもぬを

三條ちへうしうちうちうちひとをへをひうあてうれ

日もちうぬあちは日のゆふつちこれふをふふ行ふを

みちまへをあちれちをういちんうちなくたわて

まつちんちのや行ふ

秋ぢの草の末をしらぬ露のうへ

うれし枕もすゝめやうせ

うやうやうやうやうやうるぢぶしねおりさきぶれそうれ

まつ消ちぶりまつり蔦葉れえ大ねとうしつりと

おぶせとうすうすぢとき乃文れつうおも大ねあとき

ぶふうつしておきてのせてぢうぢぶとあくおきるを

うつしるとぶ

大ね

せくうふ淺くうみえん山うふの

なるしてのるをつくもてすち